

書道部の重鎮 諧謔の大家 大黒勇先生を悼む



東京医大退官のころ

大黒 勇氏（おおぐらういさむ）2月27日死去。97歳（誕生日の翌日）。昭和41年（1966）1月入会。書道部に属し、平成二十年（2008）の医家書道展が最後だった。本誌には「あんこ入り都々逸 振り文や狂歌」など、伝統的な諧謔の精神を盛り込んだ作品を発表されていた。晩年には漢詩についても蘊奥を披露された。

ちょうど100年前の500号記念特集（1999年4月号）には「題字と団体名」と題して「と題し、略字を批判、

とくに医家芸術は「醫家藝術」でなければならぬ。医も芸も正字草書体を略字化したのとは違って、全く別の意味である。その上、常用の明朝体だから、いよいよ藝術性が失われる。藝術には便利性を持ちこむ事は禁物……と意見を寄せられた。実際にエッセイや狂歌、振り文など原稿は常に旧字で編集担当者を大いに悩ませた。

趣味の本として『閑話夢幻油（むだばなしむげんのあぶら）』『真八百文字遊戯（まことばつびやくもじあそび）』『夢現奇怪話ゆめつつまきつくわいはなし』『挨拶遊言葉戯（もちりあそびことばのはむれ）』などがある。

電子顕微鏡の分野でも大家

ところで、先生が医学に電子顕微鏡を利用する技術の先駆的な役割を果たされ

たのをご存知だろうか。このあたりのことを、クラブの初芝澄雄副委員長の言葉を借りて紹介しよう。

「大黒先生は私の微生物学の先生です。戦後、電子顕微鏡がそれまでの光学顕微鏡に代わって使用されるようになり、その専門家として東京医大に迎えられました。私は内科に入学して白血病の研究をしていました。教室で作ったハツカネズミの白血病の原因を調べていて、細菌教室にお願したところ、日本で初めて白血病ウィルスを電子顕微鏡で発見、発表したことがあります。大黒先生には、大変お世話になったのです。ですから、医学の先輩として大変尊敬していたのですが、クラブに入って先生が書道をはじめ文学にも造詣が深いことを初めて知り、びっくりしました」

昭和42年4月～翌年3月まで米国立リノイ大学で研究生生活。この間、書道展を休まれた。日本細菌学会名誉会員、日本電子顕微鏡学会永久会員。

我がバリトンドクター 萩野昭三先生を悼む



萩野昭三氏（はぎのしょうぞう）5月29日死去。82歳。昭和43年（1968）2月入会。洋楽部のリーダーとして活躍されましたが、病氣療養のため第一線を退かれました。先生のご活躍を偲び哀悼の意を表します。

30年前の感激をいまに

松 木 耀 子

萩野先生のご逝去を心からお悔やみ申し上げます。

今から30年前、医家芸術洋楽部のコンサートを知り、会場へ伺いました。当時は上野の文化会館小ホールで行われていました。独唱や独奏、オーケストラと立派なプログラムでした。その中で美しい声、立派な歌唱でシューベルトを歌われたのを聴き感激しました。

先生はNHKのご自慢で全国1位になられた方です。年一度、新宿の第一生命ホールで、リサイタルをなさっていました。会場いっぱいのお客様の中に、青森県出身のお相撲さんが何人もおりました。弘前出身の先生は津軽弁の歌曲も数多くお歌いになられ、私たちを楽しませて下さいました。

また先生は音声学の大家でありました。その昔、イタリアオペラ来日時は、世界的歌手のノドの管理もなさっていました。日本の音楽家のノドも題字に診て下

さったと伺っておりました。

洋楽部の会合の後、電車の途中まで楽しく歌曲のお話をしながら帰りました。

先生、長年にわたり洋楽部のためにご尽力ください、有難うございました。

御冥福をお祈りもつしあげます。合掌

一流の世界的オペラ歌手や日本の人気歌手、俳優から絶大な信頼を得ている声の名医として、またご自身が「孫婆様」など津軽の心を歌い上げ、半世紀にわたって活躍し続けてきたバリトンドクターとしても有名です。

日本のオペラ界をリードする二期会の会員として海外公演にも参加。第一生命ホールでのリサイタル「につぼんの歌つがるの唄」は25回で終えましたが、「おぼんです」と津軽弁でステージに登場する姿は、つい先日のように。同郷出身者で埋まった会場、先生の歌声に合わせて拍手が響き、お土産のリンゴを抱えて満足げに家路につくのが恒例だった。